

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより
第24号
2018(平成30)年12月26日
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

結局は一番の近道 — 「山本家百姓一切有近道」について2 —

前号で取り上げた「山本家百姓一切有近道」の内容について、その一部を紹介させていただきます。同書は、『日本農書全集』（農山漁村文化協会発行）の第28巻(昭和57年刊)に収められている近世文書の一つです。大和国山辺郡乙木村(現在の天理市乙木町)に住していた山本喜三郎という人が、激動する時代の中で、家を守るために文政6年(1823)に著した、農事暦ふうの農書です。

綿に関する記述は、「三月」から始まります。

「八十八や三十日前に柴ハわらをたくべし。綿の畝を考て、其まき入のはいになる也(八十八夜の三十日前に、柴やわらを焚いて灰を作っておく。綿のうね数を考えて、播種のさいに灰が不足しないようにしなさい)」(同書142頁)。

「せついんのすなを此節にだし置なり。身をいとわす中へはいり、すきでたごゑ入、其すなをはいびやへ入ル時はいをおくへかきあげ、おくよりまゑまで皆しめるやう、きを付あけさすへし。此はいハ、綿まきに風ふきてもちらぬやうのかんべんなり。右ハ八十八や二十日まへにだすなり。さら水になりてハ、にごりわるい物と心得へし(便壺の底にたまった砂をこの時期に出しておく。体が汚れるのをいやがらないで中へ入り、砂を鋤で肥桶へ入れ、それを灰小屋へ運んで灰とまぜる。そのとき、前に入れた灰を奥へかきあげ、奥から手前まですべてが湿るように気をつけて入れる。綿を播くときにこの灰を施せば、風が吹いても散らないので都合がよい。この砂まじりの灰は、八十八夜の二十日前に出しておく。急に新しい水をかけても、まじり方が悪いものと心得ておくこと)」(同書146頁)。

「綿のふたきりわらハ、壱わのわらを二十所切ニして、壱日に四反置わらきるなり。二町綿ならば、五人手間と心得るなり(綿の覆いにする切わら作りについて。一把のわらを二十に切って、一日で四反分の切わらを作ることができる。二町歩の綿の覆い用の切わら作りは五人手間と心得ておけばよい)」(同書147頁)。

いよいよ播種時期になると、雇い人の人数が多すぎると却って能率が悪くなるので、事前に入念な作業計画を立てておくことが大切だと述べ、その要点について事細かに記しています。万事がこの調子です。山本喜三郎氏は同書の前書きに「只百姓ハ百姓の道を一筋にして守るなり。たとへ何程下直でも此百姓を守るなり。」と記しています。

日本農書全集校注執筆者のお一人である徳永光俊氏は、この一文を踏まえ、タイトルの持つ意味について「解題2」において以下のように解説されています。「つまりこの『百姓の道』は、勤勉・節儉といった徳目を内容としており、これを毎日の生産や生活において実践することを求めているのである。喜三郎は『百姓一切有近道』と題した農書を書き著わし、遠回りのように見えても結局は一番の近道、百姓が生きていく上で最も安全な道、『百姓の道』をさし示そうとしたのである。」(同書301頁)と。



乙木町集落全体(一番手前の家並み)を望む

Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成30年11月24日～平成30年12月23日)

茨城県1、兵庫県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成30年11月24日～平成30年12月23日)

メールを含む各種相談件数3、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数1件1名



《綿の栽培記録 2018》－ 平成30年度版 その6－

12月27日に予定している綿木引きを前に、今年度の綿の収穫状況についてまとめておきたいと思います。8月末から9月上旬にかけて台風の直撃や降雨がつづき、序盤の収穫はやや心配されましたが、その後は晴天に恵まれる日も多く、10月上中旬にかけて一定の収穫を得ることができました。ただ、洋綿については虫害を受けたコットンボールが多く、明らかに例年より少なめになりました。収穫量のデータについては、後日報告させていただきたいと思います。以下の写真は綿木引き直前の1号畑の綿木の様子と、収穫された和綿の実綿の一部(1籠約2kg)です。



【大和機(やまとばた)について】

本誌では次号より本格的に「大和機」について取り上げていく予定です。今号ではいわゆる「大和機」とはいかなるものかを説明する前に、もっとも基本となる参考文献をリストアップしておきます。その他の参考文献については、順次紹介させていただく予定です。

- ・植村和代「大和の傾斜高機について(I)」『帝塚山短期大学紀要人文社会科学編』第26号 1989年
- ・横山浩子「当館所蔵の傾斜高機－いわゆる大和機について－」『奈良県立民俗博物館研究紀要』第12号 1990年
- ・植村和代「大和の傾斜高機について(II)」『帝塚山短期大学紀要人文社会科学編』第28号 1991年
- ・横山浩子「大和の傾斜型高機－当館の収蔵資料から－」『奈良県立民俗博物館研究紀要』第13号 1993年
- ・佐貫尹、佐貫美奈子「大和の傾斜型高機」『高機物語－日本の手織り高機』(芸艸堂 2002年)
- ・植村和代「大和機の系譜」『ものと人間の文化史169 織物』(法政大学出版局 2014年)

【綿の加工の作業記録】 (梅田1人の作業量)

- ・糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：平成28年, 2016産。丹羽正行氏による打ち綿)
11月24日～12月23日 (作業実日数25日) 糸の総量124.1g (33.1匁) 総時間364分 (6時間4分)
※1分間≒0.341g 1時間≒20.5g (5.5匁)

【研修等の記録】

- ・平成30年12月09日「相楽木綿伝承館：機織り教室専科」(京都府相楽郡精華町)にてもじり通し
- ・平成30年12月11日 木綿庵2号畑の西隣畑にて綿木引き
- ・平成30年12月17日「相楽木綿伝承館：機織り教室専科」(京都府相楽郡精華町)にて箆通し
- ・平成30年12月20日「相楽木綿伝承館：機織り教室専科」(京都府相楽郡精華町)にて機掛け

【以下の写真は、左：もじり作りの途中の様子、中：もじり通し、右：大和機の全景。相楽木綿伝承館にて】

